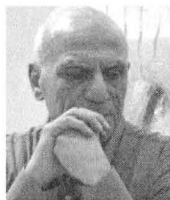


# 解説

岡崎 弘樹



言い過ぎず、言わな過ぎず。極めて個人的な、生の詳細をわずかな紙数に凝結しつつ、さらりと「政治性」を暗喩する。

イブラヒム・サミュエルの短編小説の魅力は、これに尽きる。

一九五一年、ダマスカスに生まれた。

一九六八年にシリアのサウラ紙で最初の短編「新しい洋服」(Al-thawb al-jadid)を発表。ダマスカス大学哲学・心理学部に入学した後、当時独裁政権を批判していた世俗的な青年運動組織「共産党行動派」に入った。一九七七年に拘束され、八〇年まで収監生活を強いられる。八六年にも再び一ヶ月間勾留。八八年に最初の短編小説集『重い足取りの香り』(Rahat al-Khuiwi al-thabi)をダマスカスのジュンディ社から発表。九〇年には第二作目『咳払い』(Al-nahyah) 九四年に第三作目『青き荒野』(Al-wa'r al-azraq) 二〇〇二年に第四作目『低く入

り口の家』(Al-manzil dhu-l-madkhal al-wati)の短編小説集、また九九年には評論集『紙上の空間』(Fada'at min waraq)を刊行した。これらの作品はエジプトでも再版された他、『重い足取り』は九七年にイタリア語に訳され、『青き荒野』も二〇一二年に仏語に訳されている。その他、一部の作品が英語やオランダ語、ブルガリア語などにも訳されている。

サミュエルは一九九三年からクウェートの『ライ』紙、二〇一三年以降にはアルジャジーラ・ネットの文芸欄で定期的にコラムを書き続けている。また九三年からダマスカス在住の外国人のためのアラビア語教師としても活躍し、日本の留学生や外務省・JICAの研修生も含め多数の学生に慕われてきた。

今回訳出した「面会」(al-wa'ida)は第一作『重い足取り』の巻頭作品で、八六年五月に初めて発表された。アサド政権とムスリム同胞団の血を血で洗う内乱の中、サミュエルのような世俗的な作家も過酷な言論弾圧の対象となった。サミュエルは、反体制派政党に関わっていた時代に文才を買われ政治プロパガンダ的な文章が書かされていたが、やはり自分の目指すものとは違ったようだ。

シリア人評論家マンドゥーフ・アドワーンは『重い足取り』に巻頭の辞を寄せ、次のように評している。

「この作品は政治活動によって血肉化したにもかかわらず、政治的な言葉が何一つみられない。尋問や拷問、衰弱、英雄などもみられない……サミュエルが短編小説で取り組んだのは、極めて個人的な、生の詳細を描くことだ。そこにこそ、政治的なスローガン以上のヒューマニズムがあるのだ」

サミュエルにとって収監という政治的経験の意味を深く教えたのは、逮捕や拷問といった恐怖の経験だけではなく、同部屋の間との生活ややりとり、また面会といった特別なイベントにまつわる人間模様だ。実際、サミュエル自身が収監された際に、妻のおなかに息子が宿っていたことかから、「面会」もほぼ実体験を題材としながらも、一般性を高めた作品と言える。

政治活動故に虜囚の身となった父親は、まだ見ぬ息子との顔合わせに恐る恐る出向く。一方、息子は監獄とは無関係な外部の世界、あるいは子供の世界に生き、父親は単なる話に聞くだけの存在でしかない。「違つた」という幼子の台詞は、刑務所という冷たく重い空間に、ほのぼのとした空気をもたらずと同時に、親子を引き離す二つの世界の断絶を映し出す。さらに妻は妻で何か夫に伝えたいことがあるようだ、それが家庭のこと、あるいは夫婦二人に関すること、もしくは党関係者に託された何らかのメッセージなのかは明示されない。登場人物の「す

れ違い」を描きつつ、また読者の想像力をかき立てるような展開は、作者の得意のするところだ。それは、「トイレ」(八八年)など監獄生活を扱った他の作品でも存分に発揮されている。

監獄文学という枠組みで見れば、「面会」が、ロシアの巨匠ドフトエフスキーの『死の家の記憶』やエジプト人作家ユーセフ・イドリースの『黒い警官』といった作品と同じ系列と理解されるかもしれない。サミュエル自身、実際この二人の先人から多々影響を受けたと率直に認めている。作品を特徴付けるのは、内部に生きたからこそ見える何かを新たな感性で綴ることと生まれる一市民のリアリズムと言えるだろう。

もう一つの「闇」(al-ama)もまた、このリアリズムを体現した作品である。当作品は九〇年に執筆され、『青き荒野』の巻頭作品として収められた。映画館で起こった停電によって得体的知れない「魔神」が表出するということは、決して映画館の中に留まる話ではない。映画館は、複雑な歴史的、政治的背景を抱え抑圧を内面化し過度に付加がかかったシリア社会の縮図に他ならない。しばしば「蒸気口のない圧力鍋」に例えられるこの社会は、たとえ表面上は秩序が保たれ平穏に見えたとしても、その根底で爆発寸前の何かがかうごめいている。こうした日常の「細部」に現れる社会の「全体性」あるいは「本音」を描くことは、彼の作品に特徴的だ。

市バスに乗り合う乗客が騒ぎ出した「コマを題材にした「人々、そして人々」(九〇年)なども、その例だ。

なお「闇」は、二〇〇六年にシリア国営テレビの『スポット・ライト』というドラマ・シリーズで「映画館の出来事」という題名でショート・ドラマ化された。ドラマでは治安機関の末端と思わしき男が舞台に現れ、客の一人一人を出入り口に並ばせて政府批判を行った声の主を探るべく、自分に「馬鹿」と言ってみると詰問するといったコミカルなシーンも付け加えられた。その意味で、サミュエルの作品は若手の映像作家にも影響を与える中、二〇〇〇年代以降決してシリアの教養層に留まらず、お茶の間の空間でも一部楽しまれるものとなった。

他の多くの短編小説作家は詩や長編なども手がけるが、サミュエルはあくまで短編に特化する。本人によれば、「長々とした説明よりも、一瞬見せる表情や仕草、一言、いや言葉になっていない言葉に、本質的な意味、そして物語の全てが語られていることも多い」とのこと。最も無垢な存在である子供や、映画館や市バスといった日常の空間に発露するシリア社会の深い矛盾を、まるでカメラが捉えた写真や映像を見ているような描写を交えて、僅か六頁あまりの紙幅に簡潔かつ鋭利に綴っていく。このミニマリズムの中に大きな社会関係や政治性が慎まし

く見え隠れする筆致こそ、多くの読者を惹きつけている理由だろう。